宍粟の人

播州ちくさ手漉和紙工房を訪ねて

日本名水百選の一つ、千種川源流の水を使い、手漉き紙の本流を忠実に守り、雁皮紙を漉いておられる、吉留新一さんの工房にお邪魔しました。

吉留さんは、平成4年4月、千種町に和紙工房を開業されている。

吉留さんが漉いておられる雁皮は紙の王様といわれ、日本独自の紙料であり、滑らかで緻密、虫がつきにくく耐久性のある紙で、奈良時代から上層階級では、永久保存する書冊をつくるのに広く愛用されていた。

当工房から創作される雁皮紙もその特性を最大限にいかされ、文化財補修用紙としても、国内外を問わず使用されており、宮内庁書陵部や国立博物館などにも納品されている。

大量生産のためには、各工程に人を配置し、紙を作るのが現代のやり方であるが、吉留さんは、12工程をひとりで作業されている。師匠の「紙は心で漉け」の教えを守り、一枚一枚、心を込めて漉いておられる。

紙漉きという伝統文化を継承するには、千種の自然を愛し、清らかな水・気温が最適条件であり、手広くしないといわれたのが印象的であった。

開業されて16年、地域にしっかり根を張り、元文化財保存修理研究員で最大の理解者である奥様と、二人の子どもさん、「家族がいるから今の自分がある。」と。

小さな子どもさんたちにお父さんと一緒に漉いた雁皮紙とお手紙をプレゼントされ、心温まりながら千種をあとにした。

播州ちくさ手漉和紙工房
宍粟市千種町河内533―1
TEL　0790―76―3716